



来

2月29日

Sudden Fiction Project

高階經啓
hirotakashina

部屋を片付けてさっぱりしたら、景気のいい声が近づいて来た。

「えっほ、えっほ、えっほ、えっほ」
「さあ、来た来た」
「聞こえて来たぞ」
「グルファンなの？ 本当にグルファンなの？」
「ああそうだよ。いい子にしているんだよ」

期待と不安でいっぱいの子もたちがわけのわからぬ叫び声を上げる。グルファンのことは昔話で聞いたり、絵本で読んだりしていたものの、それはあくまで「悪魔」や「妖精」と同じく、お話の中の存在に過ぎなかったからだ。12年に1度、本物のグルファンが現れると言われても全然本当のこととは思えなかったに違いない。あるいはクリスマスのサンタクロースのようなものをイメージしていたかもしれない。

「えっほえっほえっほえっほ」
だんだん近づいてくるかけ声は、それが架空の存在ではないことを示している。

「近づいて来たか」
「もうじきだ。すぐに来る」
「はかっていたようなタイミングだな」

朝から集会所では近所の住人が総出で片付けをやっていた。12年ぶりのグルファンが気持ちよく過ごして、次もまた来てくれるように、心をこめて掃除をした。大人も子どもも一緒になって集会所を隅から隅まで磨き上げた。

「えっほえっほえっほえっほ」
もうすぐそこまで来ているくらいははっきりと聞こえるのに、声はなおもまだ、どんどん大きくなっている。

「やだやだやだおうちに帰る」
「大丈夫だって、お父さんもお母さんもここにいるから」

いよいよ本当に来たと聞かされて軽いパニックを起こしたのか、急にぐずり始める子どももいる。なだめている若い親たちの中には不安げに身を寄せ合い、子どもをひしと抱きしめるものもいる。年寄りたちはそんな若い家族を温かい目で見守っている。

今日、小さな子どもたちは濡らした新聞紙をまき散らしたり、こびりついた汚れを濡らしてふやかす方法を教わったりして、細かい塵やホコリや汚れを取り除くことを覚えた。少し大きな子どもたちは掃き掃除と雑巾がけを徹底的に仕込まれ、身体が大きな子どもたちは高い場所の明かりや窓ふきなどの掃除に駆り出された。子どもたちの掃除を監督する大人たち以外は、男たちは建物の修繕や荷物運びをし、女たちは料理や飾り付けにかかり切りだった。12年に1度のグルファン迎えは子どもたちの躰の場でもあるのだ。

どんどん高まる一方で、耳が痛いほどの大音量で近づいていた「えっほえっほ」というかけ声が、不意にやんだかと思うとがらがらと大扉が開き、グルファンが飛び込んで来た。丸めた背が大扉の上部にかすりそうなくらい大きい。全体はとんでもなく大きなコガネムシが後ろの2本の脚で立ち上がったような形をしている。これは昔話の中でもよくそのようにたとえられるのだが、本当に良く似ている。背中を覆った堅い鎧のような表皮が鈍く金属質に光っている。

巨大な目玉は左右に突出し、長い舌がベロベロと鋭い歯の間から垂れ、よだれが床にしたたり落ちる。そのよだれは血が混じっているように赤い。子どもたちはあまりの恐ろしさに絶叫して逃げ惑う。親は押さえ込もうとするのだが、子どもたちの恐怖は想像以上に大きく、親の手を逃れ、とにかくどこか部屋の隅に隠れようとする。子どもが自分の手を離れたとなると親も不安になるらしく、もうさきほどまでのように落ち着いたふりはしていられない。

「迎えの者には会いませんでしたか？」

グルファンに連れがいないことに気づき、係の者が尋ねる。グルファンはそれには応えず、ふんふん、ふんふんと鼻を鳴らしている。

「お荷物はどこかいの？」グルファンが言う。低く轟くような声なのにキンキンと耳障りな雑音が混じっている。部屋の隅から子どもたちの悲鳴が湧き起こる。「早よ出さんとえらいこっちゃで」

「まあまあ、お神酒でもお飲みなさい」

もう何度もグルファンを迎えたことのある長老がなみなみと酒をついだ器を持って近づく。せかせかと慌ただしげなグルファンをそうやってなだめるのだと昔話にも語り継がれている。その途端にグルファンが激しく頭を振り、長老が横なぎにされ宙を飛ばされてしまう。ぐげ、と妙な声を立てて長老は料理を用意したテーブルに激突し、動かなくなった。

大人たちは騒然となった。さっきまでぐずぐず言っていた子どもたちはもはや恐怖のあまり声も出せない。

「なあ、お荷物はどこかいの？」グルファンが言った。「さっきのがお荷物か」

言うが早いかグルファンは飛び上がり、倒れたままの長老の上に馬乗りになった。巨大なコガネムシの下敷になって長老の姿が見えなくなると、何人かの大人たちがあわててグルファンに駆け寄り、引きはがそうとしたが、その時、ごきっ、ぐちゃ、ごりごりという嫌な音がして、グルファンが何かを噛み砕く音が続いた。

部屋のあちこちで嘔吐する音が聞こえた。

突然グルファンの堅く丸い背中がブルブルっと激しく震え、途端にグルファンを引きはがそうと手をかけていた大人たちが4人、てんでな方向にはじき飛ばされた。一人は拭き掃除を終えたばかりの壁に激しく頭を打ち付け、鼻血を流しながらへたりこんだ。

「どうしたんだ」何度もグルファンを迎えて来たはずの大人たちがあたふたと騒ぐ。「グルファンはどうしてしまったんだ」

「ちゃうやんけ」たったいままで長老の上に屈み込んでいたグルファンが振り向きざまに言い放つ。「これ、お荷物ちゃうやんけ。長老やんか」

「お願いしますグルファン、お荷物ならここにありますから」

大きな荷を両手で抱えて喋りはじめた男に向かって、グルファンが口から何かを吹き飛ばす。それは人間の手の形をしたもので、それを見てまた何人かがげえげえと吐き始める。

「かったいわ、それ。ものごつつ固いわ」グルファンは長老の手のことをそう評した。「こんなんちゃうねんお荷物は」

「ですからお荷物はここに！」

「もっとやらかいのがええわ」

「やらかいって？」

「長老とちごて、もっとやらかいのやったら食えると思うわ」

「グルファン！」

「やかましわ」

グルファンは首を振って男をなぎ倒すと叫んだ。

「こどもや。ちっこいこどもを寄越せ。それで勘弁したる」

小さな子どもを持つ親たちはみな立ち上がり、一斉に子どもたちの方に駆け寄る。

「ぐじゃぐじゃやかましねん」グルファンは不意に背中中の鎧を広げ振るわせはじめた。羽根だったのだ。そして狭い集会所の中で浮かびあがり、部屋の隅に隠れる子どもたちめがけて飛びかかった。「どこや。お荷物はどこや。お荷物寄越さんかい」

子どもたちのつんざくような絶叫が響き、グルファンの羽音と共にすさまじい騒音をなす。子どもたちのほとんどは失神し、小便を垂れ流す。その時一人の少女が立ち上がり、食卓の豆をつかみグルファンに投げつけた。最初グルファンはそれに気づかなかったが、何度か豆をぶつけ

られ、ゆっくり少女の方に向かって旋回した。その瞬間、少女の投げた豆はグルファンの腹部に命中し、とたんにグルファンの羽根は動きをやめ、落下した。

「あかんであかんで」グルファンは地べたに丸くなってしっかり羽根を閉じた。「あかんであかんで豆はあかんで！」

まなじりを決した少女は勇敢にもグルファンに歩み寄り、幾度も幾度も豆をぶつけ続ける。「堪忍して！堪忍してえな！」グルファンはのたうつ。「どないなっとんねん。なんでこない乱暴すんねん」

少女はただ黙って豆を打ち付け続ける。少女が机に豆を取りに戻った際にグルファンはちょこまかと駆け出し、大扉から外に飛び出していった。少女はそのまま豆をつかんで外まで追い、離陸したばかりのグルファンめがけて投げかけた。グルファンは中空でバランスを失い、ずっこけながらも命からがらという感じで飛び去った。

こうして12年に1度のグルファン迎いの儀式は終わった。大人たちは再び集会所を片付け、つくりものの反吐をふき取り、名演技をした長老を讃え、そして何よりも勇敢だった少女を賞賛した。グルファンに入っていたのは3人の“迎いの者”だった。いつもの通りのいつもの儀式。こうすれば子どもたちは決してお荷物にならないようになる。お荷物とだけは思われぬように頑張る。そういう風習なのだ。

幾度も繰り返された儀式。お荷物を探し求めるグルファン。襲われる長老。あたふたする大人。その時々にあれこれ手を加え工夫をしてグルファン迎いを盛り上げる。少しずつ過激になる傾向はあったが、だいたい笑話で済んだ。けれどもこの年はやり過ぎた。子どもたちは深いトラウマを負った。確かに彼らは長じてお荷物にならないように努力をしたが、それは自発的な努力と言うよりは強迫観念と呼んだ方がよさそうだった。そして村の指導者となることを期待された少女が成人する頃になって、あの年のグルファン迎いがやり過ぎだったことが判明するのだが、まだその時は来ない。

(「荷物」 ordered by tom-leo-zero-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

● [「SFPインデックス」](#)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひよっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

来

<http://p.booklog.jp/book/45173>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/45173>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/45173>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.